

東京透析研究会のこれまで

秋澤忠男

令和5年2月19日/東京都「第50回東京透析研究会」

要 旨

第50回の記念大会を迎えた東京透析研究会は、本邦でも最も長い歴史を持つ地域の透析医療に関する学術集会の一つである。本稿ではその歴史を振り返るが、地域学術活動の成果と同時に、その課題と問題点理解の一助となることを期待したい。

1 東京透析研究会の生い立ち

本研究会の源流は1973年に創立された東京透析懇談会（以下懇談会）に遡る。この年の8月、当時、東京女子医大の杉野信博教授と太田和夫教授が中野サンプラザで会談し、東京都内で透析医療に従事する医師、看護婦、技術者を対象に、1. 透析の初歩的教育、2. 経験した症例を皆で討論して共に見識を広げること、を目的に懇談会の設立が決定された。設立幹事として、内科系から前田貞亮（東京大学第一内科）、三村信英（虎の門病院）、杉野信博（東京女子医大）、川口良人（慈恵医大第二内科）、外科系から水野克己（東大医科学研究所外科）、太田和夫（東京女子医大）、大沢 炯（慶応大学泌尿器科）、稲田俊雄（都立大久保病院透析科）の各先生が選任され、初代表幹事に前田貞亮先生が決定された。ちなみに、中野サンプラザはこの年の6月に竣工、使用が開始され、50年後の今年（2023年）6月に閉館、解体される。

2 当時の透析事情

人工透析研究会（当時）の統計調査資料によると、1973年の全国透析患者数は6,148人と報告されている。透析医療は健康保険の適応にはなっていたが、高額医療から自己負担の支払いが難しく、「金の切れ目が命の切れ目」という悲惨な例が稀ではなかった。こうした事態を回避すべく透析患者に更生医療が適応されたのが1972年で、このような背景から当時は腎炎由来の若年患者（健保本人、富裕者か生活保護受給者）が主体であった。バスキュラーアクセスは38.7%が外シャントを使用し、透析機器ではコイル型が最多で、キール型が続き、ホローファイバー型透析器はほぼ使用されていなかった¹⁾。貧血管理も現在のガイドラインの下限 Hb 10 g/dL 以上を満たす患者は2%にも満たず²⁾、平均 1.54 本/月の輸血が行われながら、平均 Ht は 21% 弱に過ぎなかった。こうした状況から患者予後も現在とは比べようもなく、1年生存率 70%、5年生存率は 26.4% であった¹⁾。

表 第1回東京透析懇談会のご案内 (1973年)

透析療法の発展により、腎不全患者で透析治療を受ける症例も増加し、またこれにより社会復帰の出来る患者も非常に多くなってまいりました。

しかし治療成績が向上したとはいえ、なお欧米のそれに比すれば充分とは申せません。

透析療法はこれに伴う合併症、事故もないわけではなく、さらに機械の操作方法など、医療技術的な問題点もあります。

慢性透析療法を成功させるためには、単なる医療スタッフのみならず、多くのパラメディカル部門の協力なしには、出来なくなってきております。これらの部門も含めて気軽に質問をし、また十分な討議の出来る機会を作ってほしいという希望が多くの施設から出ております。

さらには、これから透析療法をはじめる病院からも、その手続や機種を選定等に関し、多くの質問もあります。これらの要請にこたえるため今回東京透析懇談会を発足させ、皆様のご要望に応じると共に透析治療成績向上に協力することになりました。

つきましては、下記により第1回の懇談会を開催することになりましたので、透析に関心のある方はどなたでも、ご自由に参加、ご討議下さるようご案内申し上げます。

3 第1回大会

1974年3月、第1回大会が開催されるに先立ち、表の案内が都内の透析施設に配布された。当時の透析事情を垣間見ることができる。プログラムでは、最初に大島研三（日本腎臓学会理事長、日本大学教授）と木本誠二（三井記念病院院長、東大名誉教授）の両先生から開会の辞が述べられ、その後以下の三つのテーマについて討論された。

1. 透析療法における医師、看護婦、技術員、ケースワーカーの役割について
2. 治療上問題のある透析例（応募症例について、幹事及び一般参加者が討論）
3. 透析医療費の公的負担について

当時臨床工学技士制度は存在せず、技術員と記された透析医療に不可欠な国家資格を持たない医療職員の処遇は大きな問題で、第2回の大会（1974年12月開催）でも「専門技術員認定問題のその後の経過報告」として取り上げられるなど、1987年の臨床工学技士法成立までの大きな課題となっていた。

4 懇談会の歩み

第3回大会以降、年1回開催となり、広く一般演題を募り、医師、看護師、技士、MSW、栄養士などの職種の壁を越え、日曜日1日発表と活発な討論が行われた。一時演題数の増加から複数会場での開催も試みられたが、「経験した症例を皆で討論して共に見識を広げる」という本会設立の目的に立ち返り、1会場での開催に戻され、この目的はその後も連綿と受け継がれてきた。また、一般演題とは別に、透析医療のトピックスについて全国から第一人者を招聘して教育講演を依頼し、広く透析医学の知識の普及・啓発にも寄与してきた。

第20回大会（1992年）に代表幹事が、長く務められた前田貞亮先生から太田和夫先生に交代された。太田先生は37回大会まで代表幹事を継続され、2009年に名誉会長に就任された。以後、筆者が第3代の代表幹事を務めてきたが、幹事の方々の協力を得て、特別講演やランチョンセミナーの開催など、プログラムの多彩化と充実に取り組んだ。

5 懇談会から研究会へ

本会は発足以来、扶桑薬品が共催企業となり、その後現在の協和キリン社が共催に加わり、会が運営されてきた。しかし、さまざまな規制の中で製薬会社共催での会の開催が困難となった。そこで、単独で会を継続することとし、開催・運営資金調達を目的に2016年、第44回大会から東京透

析研究会に会の名称を変更した。自主運営に当たり、従来の形式に加え、教育セミナーの開催など、プログラムの更なる多彩化を図った。会の開催会場は中野サンプラザ（1,2回）以来、都市センター（3～5回）、全電通労働会館ホール（6～14回）、東京年金基金センターセブンシティ（15～32回）、津田ホール（33回）、日本教育会館一ツ橋ホール（34～37回）、東京女子医大弥生記念講堂（38～47回）と多岐にわたるが、建て替えとなったり、他の用途に転用され、姿を消している所も多い。

6 新型コロナウイルス感染症の影響

第48回大会は2020年2月16日、東京女子医大弥生記念講堂で開催が予定されていた。しかし14日夕刻の女子医大教授会で、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、弥生記念講堂の使用が即日禁止となった。このため、会の開催は急遽中止とせざるを得ず、既にプログラム・予稿集は配布済であったことから、会は誌上開催することとなった。第49回大会は2021年2月に開催が決定していたが、新型コロナウイルス感染が継続し、再三延期を繰り返した挙げ句、2022年2月、Webにてonline開催された。つまり、2021年には大会は開催できない結果となった。

7 第50回記念大会を迎えて

そして、本来昨年開催されるべきであった50回記念大会を、2023年2月19日、初めて東京医大病院臨床講堂で開催した。直前まで収容者数の制限が課せられていたが、菅野義彦幹事のご配慮で制限が解除され、真新しい素晴らしい会場での開催となった。「東京透析研究会第50回大会を記念して」と題した特別企画では、安藤亮一、要伸也両幹事の司会で、筆者が「東京透析研究会のこれまで」を講演した後、慈恵医大・川口良人先生から東京透析懇談会設立幹事としてのご挨拶を頂いた。その後、菅野義彦幹事より「東京透析研究会のこれから」と題した講演を頂き、企画が終了した。本会は20題の一般演題とランチョンセミナー、教育セミナーを加え、約200人が参加した。来年以降も、この伝統ある会が継続し、更なる発展を遂げることを祈念して筆をおく。

謝 辞

本稿を執筆するに当たり、設立幹事の先生方、初代代表幹事前田貞亮先生、第2代代表幹事太田和夫先生、会の運営に当たられた多くの幹事の皆様、共催、協賛頂いた企業、研究会を運営頂いたメディカル東友の皆様、そして多数の参加者の皆様に深謝申し上げます。

文 献

- 1) 小高通夫：わが国の透析の現況。人工透析研究会誌 1974；7：184-189.
- 2) 小高通夫：わが国の透析の現況。人工透析研究会誌 1972；5：92-97.